

カウンセリングに関する実験的検討 (I)

—非言語的な視点から—

教育心理学研究室 佐 治 守 夫

教育心理学研究室 鵜 養 美 昭

Experimental Study on Counseling (I)

—A Non-verbal Aspect—

Morio SAJI and Yoshiaki UKAI

There are two major purposes in the present thesis. In the first place, we aim to count out the visible physical movements of counselors and their clients seen in an experimental counseling situation. In the second, this study aims to try to divide the counseling pairs into three groups with the aid of Tabata's "Psychotherapeutic Experience Inventory" and to examine the statistical difference of the numbers of the movements between high-score group and the low-score one.

In the procedure of comparison between the two, we found that the numbers of the movements of the high-score group change in a consistent way in harmony with the therapeutic process and that of the low-scored do not. Another major finding is that the number of the movements of counselors and clients is influenced by his inner attitude and emotional state.

I 研究目的

カウンセリングにおけるコミュニケーションに関しては従来より多くの検討がなされてきている。これらの研究は、ロジャースらの「過程尺度」ツールアックスの「DX尺度」等、コミュニケーションの結果としての人格変化を測定しようとする試みが主となっている。また、その測定法は質問紙、第三者による評定を用いるものが大部分である。

しかし、これらに用いられている概念は、実際には内容的に多岐にわたり、行動レベルでの把握が非常に困難であり、また態度の現実的表出であるコミュニケーションの様式及び内容を充分明きらかにしているとは言えない。さらに、カウンセリング関係が相互に影響しあう関係であることもあまり考慮されていない。

以上の認識にたつて、カウンセリングにおけるコミュニケーション自体の様式及び内容を、相互性に着目しながら実験的に操作しうる形でとりだす試みが企画され

た。以上の意図に基いて一連の実験面接¹⁾が計画され、施行されたが、本論文では、それを主に非言語的な「動き」の側面から検討する。

カウンセリング又は心理療法におけるコミュニケーションに非言語的な視点から検討を加えた研究は多い。しかし、科学的・組織的な研究がなされるようになったのは1960年代に入ってからである。Gladsteinはこの領域における業績を調査し、以下の問題点をあげている。第1に未だ研究の数が限られていること、実験的に検証可能な方法を用いているものが少ないこと、更に実験的な研究であっても、現実の helper-helpee 関係を扱ったものが非常に少ないこと等である。彼は調査時点までになされた研究のうち、わずかに15の論文が信頼に値するものと結論している²⁾。

また、本領域における研究は、臨床的な即応性を求めるあまり、十分な検討を付す以前に具体的な個別動作を Non-Verbal Communication の一様式として、状況から切り離して有意味なものとして定位しようとする傾向も強い。

従って本実験を施行する際には以下の諸点を吟味して実施した。(1)検証可能な実験設定(最も一般的な1対1のカウンセリング場面をVTRに収録する)、(2)現実のカウンセリング場面、(3)「動き」に恣意的な意味づけをしないこと、(4)被験者数、の4点である。更に、被験者に関しては、個有の人格を尊重し、自己実現、自己治療を阻害しないようにすることが、特に配慮された。

上記の前提を踏まえたうえで、心理治療面接場面におけるセラピスト、及びクライアント双方の「動き」を実験的な設定で数量的にとりだすことを本論文の第1の目的とし、セラピストとクライアントとのペアのカウンセリングにおける体験の特質によって層別化された各群の間で比較検討を行なうことを第2の目的とする。第2の目的については、特に初年度の3回の面接に関して行ない。高水準のカウンセリング的なコミュニケーションを行なった群と低水準のそれとの差異を明確にすることを主眼とする。両群の特質を明確にすることを主眼とする。両群の特質が明確にされたとして、その特質が次年度にはどのように推移しているかを検討することを第3の目的とする。

II 方法

A 実験場面

現実のカウンセリングを行なう面接室を設定し、VTRの機器を設置した(図1)。面接室には、テーブル、椅子、ソファの4点セットが配置され、セラピストは椅子—Th.に、クライアントは椅子—Cl.にすわるように指示した。VTRのカメラは、カメラ1がセラピストを、カメラ2がクライアントを写すようにセットされた。これらの場面設定は最初の面接から最後の面接まで、すべ

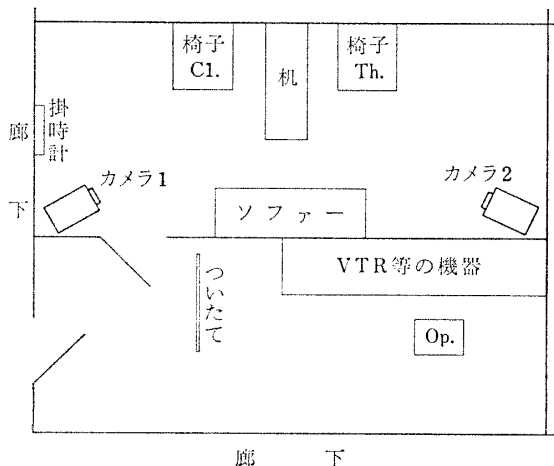


図1 実験面接室

て固定された。

またカメラの操作のために隣室をオペレーター・ルームとし、VTR、コントロール・パネル等を整備した。

B 視験者

被験者としては、セラピスト、クライアントの双方とも実験を了承してくれるボランティアを募集した。セラピストは東京大学教育相談室の構成員から、クライアントは東京大学教育学部教育心理学科の3年生から募集し、各々15名ずつ計30名を抽選で15組のペアに振り分けた。

セラピストの男女比は8対7であり、大学院生(修士課程3名、博士課程3名)、研究生2名と他に社会人としてカウンセリングに従事している者7名(中学、高校のスクール・カウンセラー3名、家庭裁判所の調査官2名、文部教官研究職1名、同教育職1名)であり、年齢も20代から40代に及んだ。カウンセラーとしての経験は殆どないものから10年に到るものまでが含まれた。

クライアントの男女比は12対3であった。クライアントの募集に際しては、週1回50分ずつの面接を初年度に3回行なうこと、また次年度に1~2回行なうこと、その様子をVTRに収録させてもらうことを伝えて了承を得た。また、内容はまったくクライアントとセラピストとの両者にまかせ、思うようにやってもらいたいことを伝えた。

C 実験手順

実験は1978年7月に開始し、約1ヶ月間で各ペア3回ずつの面接を各々50分にわたって行なった。また1979年7月から9月にかけて各ペア2回ずつの面接を同様に行なった。1978年度は15ペアが3回ずつ計45の面接を実施し、1979年度は15ペアの内1ペアを除き、残りの14ペアが2回ずつ計28の面接を行なった。

面接の様子はVTRの画像の右半分にセラピストの全身が、左半分にクライアントの全身が写るように事前に調整された。また画像の右下端に面接月日と、面接回数、面接開始時点からの経過時間が、10分の1秒単位で記録された。

各々の面接に際しては田畑の「心理治療体験目録」(以下「体験目録」と略)を施行した。各面接の直前にセラピストにセラピスト用の「体験目録」の前半に記入してから面接室に入室してもらい、また面接終了直後に、クライアントにはそのまま面接室でクライアント用「体験目録」を、セラピストには別室でセラピスト用「体験目録」の後半を施行した³⁾。

なお、各面接ごとに研究グループの構成員である飯長と鶴養（以下オペレーターという）とが交代で、VTR機器の操作、「体験目録」の配布、収集ならびに面接後の「体験目録」記入後の簡単な感想聴取等に従事した。この感想聴取は、なるべく生のままの感じを聞こうとする試みであり、「どうした」又は「どんな感じだった」などの単純な問いかけの形で行なわれた。

1978年度の第3回目の面接終了後と、1979年度の第5回目の面接終了後との2回にわたって、オペレーターにより口頭で質問を行なった。この質問は「体験目録」記入後、セラピストには別室で待機してもらい、面接室でまずクライアントに対して行ない、次いでセラピストに対して行なった。

転居により1979年度は実験が実施できなくなった1ペアを除き14ペアは全5回の面接を計画通り完了した。その内VTR画像の乱れ等により除外された3ペアを除いて、11ペアの面接記録が以下の方法で処理された。

C 結果の処理

1. 「動き」

面接を収録したVTRテープから、各面接ごとにタイム・サンプリングにより5ヶ所ずつ、計275ヶ所が別のVTRテープに編集された。5ヶ所の内訳は、開始後30秒～50秒の20秒間（セクションA）を含む面接開始から2分20秒後まで、開始後5分～5分20秒の20秒間（セクションB）を含む4分40秒から6分までの80秒間、開始後30分～30分20秒の20秒間（セクションC）を含む、29分40秒から31分までの80秒間、終了前5分20秒～5分の20秒間（セクションD）を含む同5分40秒か4分20秒までの80秒間、最後は、終了前50秒～30秒の20秒間（セクションE）を含む同2分20秒からの140秒間である。

次に各セクションを音声なしの画像だけで視聴し、あらかじめ作製された記録用紙に、肉眼で確認される動作を逐一記録した。視聴ならびに記録は鶴養が一人で行なった。

記録は各「動き」ごとに行ない、「動き」の起生する部位、方向、開始時刻、継続時間等に関して行なわれた。なお、記録は予備実験の際に作成された規準によった。各項目に関する分類の概略は以下のとおりである。

(1) 部位は、上半身、頭、腕、手、腰、脚、足の7部分に分割された。更に細かい部位に関しては、全身をVTR画像の半分に映し出すため肉眼による確認は不可能と思われた。

(2) 方向に関しては、向きと目標とに下位区分された。向きは更に往復動作とそうでないものに分けら

れ、各々に関して前後、左右、上下、開閉、動きを伴う接触、動きを伴わない接触とに分けられた。

目標に関しては、自分の身体、衣類、自初以外の対象に下位区分され、計96の目標が設定された。

(3) 時刻は「動き」の開始、終了が肉眼で画像中に確認される時点を10分の1秒単位まで記録された。その際の視聴は、平常スピード、スロー・スピード、手動の3手段によって精確が期された。

2. 心理治療体験目録

「体験目録」の処理は田畑の行なった集計方法に従って行なわれた。「体験目録」はカウンセリング実施前、実施中、実施後にセラピスト及びクライアントが感じると想定される体験を記した項目に関して5段階で自己評定させる質問紙である。同種の質問紙の中でも新しく、また、実証的にも評価されているものであり、セラピスト用とクライアント用の2種が用意されている。両者それぞれに8要因から構成されており、標準化のための因子分析によって各々3因子が抽出されている。セラピスト用の「体験目録」は面接直前の3要因（Basic emotional security; Willingness to meet and to help; Strictness to the self）、面接中の3要因（Feeling into “Lethality”; Deep respect; Genuineness or congruence）、面接直後の2要因（Level of satisfaction and warm-feelings; Reconstruction and reservation of client images）によって、またクライアント用は面接直前の3要因（Basic emotional security; Willingness to be met and to be helped; Strictness to the self）、面接中の3要因（Perceptions of Therapist’s Feeling into “Lethality”; Perceptions of Therapist’s Deep respect; Perceptions of Therapist’s Genuineness）、面接直後の2要因（Level of satisfaction and warm-feelings; Reconstruction and reservation of the therapist images）によって構成されている。

III 結果と考察

A 心理治療体験目録

本論文では被験者群を、高得点群（ペア1,2,3）中間群（ペア4,5,6,7,8）、低得点群（ペア9,10,11）の3群に層別化した。この際の尺度としてはセラピストとクライアントの得点を1回目から3回目まで加算したペアの総得点を用いた。

尺度としてペアの総得点を用いることは、本来は異なるセラピストとクライアントという両群に属する個人の得点を加算するということになり、統計学的な意味から

は、厳密には問題なしとはしないが、各ペアの性格を1回目面接直前から3回目面接後までの全体を通して反映する数値として採用することとした。

以下に層別化の妥当性を側面から検討する意味で、「体験目録」自体の結果を若干検討してみたい。

「体験目録」の得点の総和は、セラピスト、クライアントそれぞれに関して表1のように推移した。初年度の3回の面接ではセラピストの得点は1回目から2回目へと大きく増加し、3回目も増加している。クライアントの得点は1回目から3回目までほぼ同一の勾配で増加している。次年度の2回の面接でも、セラピスト、クライアントともに、得点は4回目よりも5回目の方が高い値となった。

表1 体験目録回間比較

		1回目	2回目	3回目
セラピスト	Σ	350	780	840
	\bar{x}	31.82	70.91	76.36
	σ	51.91	40.56	42.91
クライアント	Σ	314	418	518
	\bar{x}	28.55	38.00	47.09
	σ	36.45	41.06	39.89

表2 体験目録、群間比較

		1回目	2回目	3回目
セラピスト	高得点群	60	115.7	132.7
	中間群	34	70.6	67.4
	低得点群	0	26.7	35
クライアント	高得点群	52	77.3	83.7
	中間群	41	30.6	53.6
	低得点群	-15.7	11	-0.3
ペア	高得点群	112	193	216.4
	中間群	75	101.3	121
	低得点群	-15.2	37.7	34.7

* 各群の構成人数が異なるので、本表は平均値を記入した。

さて、各群の「体験目録」のスコアのうえでの特徴をそれぞれ概観しておきたい。3群の回をおっての変化は表2のようになった。

セラピストに関しては、高得点群で1回目から2回目、3回目と、回をおって増加した。中間群は、1回目ももっとも低く、2回目ももっとも高くなっている。低得点群では、0、26.7、35と増加した。中間群以外は、回をおうに従い増加がみられたがその幅では高得点群が低得点

群を大きく上回った。

クライアントに関しては、高得点群は表のように、回をおって増加し、他の2群では、いずれも2回目が最高または最低となった。

ペアに関しては、高得点群が回をおうごとに増加し、中間群も一応その傾向が見られた。しかし、低得点群では2回目は1回目 비해増加したものの3回目では減少している。

結局、セラピスト、クライアント、ペアの3者ともに一方的な増加がみられたのは高得点群だけであった。

更に、それぞれのペアに関して表3のような推移がみられた。

表3 体験目録、個人

ペア番号	セラピスト				クライアント			
	1回目	2回目	3回目	計	1回目	2回目	3回目	計
1	74	125	157	356	104	128	112	344
2	101	140	136	377	3	24	42	69
3	5	82	105	192	49	80	97	226
4	83	83	101	267	36	55	41	132
5	47	75	62	184	56	55	16	127
6	9	65	52	126	38	34	90	162
7	68	82	51	201	38	-32	47	53
8	-37	48	71	82	17	41	74	152
9	46	59	73	178	1	-2	16	15
10	35	52	17	94	-8	34	-3	23
11	-81	-21	15	-87	-40	1	-14	-53

すなわち、高得点群のセラピスト、クライアントの6名のうちクライアント1を除く5名は1～3回の面接の得点が一様に増加している。唯一の例外のクライアント1は、3回目の得点が若干低下したものの、他の10名のクライアントと比較すると非常に高得点のところ安定していると思われる。従って、高得点群の各ペアは、高水準の得点に安定しているか、又は、着実に得点が増加していったペアである。

中間群の10名の内、ペア4は得点総和(1～3回目)が第4位でもあり、セラピストの得点が一応は増加しているという点では高得点群に近似するが、それも高得点群の3名のセラピストほどに着実な伸びは示さず、またクライアントの得点も2回目が最高となっている。ペア5,6,7も、高得点群ほどの高水準ではなく、また一様に増加しているわけでもない。ペア8は、セラピスト、クライアントともに、一様に増加してはいるが、セラピストの1回目の得点が負であり、全体としては低水準の得

点にとどまったと言えよう。

低得点群の6名は、セラピストもクライアントも非常に低い水準にとどまった。セラピスト9は一見着実に得点を伸ばしているようではあるが、相手のクライアント9の得点は低迷している。

換言するとセラピストに関しては、セラピストの1～3の3名と他の者との間にセラピスト4が特有の位置を占め他との境界になっている。またセラピスト11が他の10名と比べて極端に低い得点であるのも注目される。クライアントに関しては、クライアント1～3の3名が、上昇傾向又は高水準安定で1群をなし、クライアント9～11の3名が極端に低い水準で他とは明瞭に区別される。

全体として、「体験目録」のスコアを見る限りでは、上位群、中間群、下位群の3群は画然と区別されていると言えよう。

この差異は、「体験目録」を構成する8要因、3因子のいずれにも見られたが、本論の趣旨ではないので詳述は避ける⁴⁾。

以上が「体験目録」のスコアの上での概要であるが、実際のカウンセリングのプロセスの中でも上述の差異を浮き彫りにする結果となった。高得点群のクライアント1, 2, の両名は1978年度の実験面接が3回とも終了したのちに、それぞれ別個に各々のセラピストに面接の続行を要望し、両者ともに面接を継続した。本論文でとりあげた11ペアの中で面接を続行したのはこの2ペアだけであった。またクライアント3は実験面接の2回目でははやばやと一つの山を迎え、3回目で整理の段階に入り、終了時点では、面接の中で語りあわれたことを現実に適用してやっていきたい、それは一人でなんとかやっていけそうだということをセラピストともども確認しあっている。

以上で「体験目録」の結果に関する検討を終え、次項からは本論文の主題の検討に入りたい。

B 「動き」

「動き」に関しては初年度の3回の面接について11組の計33面接の資料を得、次年度の2回の面接については高得点群と低得点群との計6ペアの資料をフォロー・アップとして得た。

さて、本項では、初年度の3回の面接の結果から、まずセラピストとクライアントの全動作の結果を各々全体として検討し、次いで「体験目録」の結果によって層別化された高得点群、低得点群の2群の各々について全5回の面接における全動作の結果をセラピスト、クライアントの各々に関して検討し、考察する。更に、各群の中

から「体験目録」でもっとも高いスコアを示したペア1と、最も低いスコアを示したペア11とを特にとりだして検討する。

1. セラピストに関して

初年度の3回の面接で数え挙げられたセラピストの「動き」は1899にのぼったが、全般的にはクライアントのそれ(2582)の約3/4程度であった。これは面接の各回に関してもそれほど大きくいちはない。セラピストの場合は、1回目が一番「動き」の頻度数が多く、2回目でやや減少し、3回目には再度増加している。

全面接をとおしてみたとき、セッションA(面接開始後30秒から50秒の20秒間)に動きがもっとも多くあり、セッションB(開始後5分から5分20秒の20秒間)になると、その2/3程度に減る。セッションC(開始後30分から3分20秒の20秒間)の動きの頻度が最少であり、以後セッションD(終了前5分から5分20秒の20秒間)、セッションE(終了前30秒から50秒の20秒間)と徐々に漸増し、セッションEでは、セッションBを多少上回る数の「動き」がみられた(表4)。

各回ごとに分けてみると、第1回目の面接では、セッションAが、3回の面接の中で最も多く「動き」のみられたセッションである。頻度はセッションB、Cと急激に減少し、セッションD、Eと勢いを増しながら徐々に増加する。なお、セッションCは3回の面接を通じて最も「動き」の少ないセッションとなっている。

2回目になると、セッションAでは1回目ほど多くの「動き」はみられず、1回目の同セッションの3/4強である。セッションBは、同じく4/5弱となる。2回目もセッションCでの動作頻度が最少ではあるが、1回目ほどには減少していない。全体的に傾きがゆるやかになり、セッションDとセッションEでは、頻度がほぼ同数となる。

3回目は2回目よりもゆるやかとなり、セッションAの頻度数144と、セッションBの114との間に以後の3セッションはおさまっている。

3回を通してみると、1回目が一番増減が激しく、回を追うに従って安定していくのが全般的な傾向といえよう。

2. クライアントに関して

クライアントに関しては、各回間の増減はやはり、2回目が最少であった。セッション間の比較では、セラピストと同様にセッションAで頻度ももっとも高かった。セッションB～Eは大きな差はないが、セラピストのときとは異なり、若干右下がりの傾向にあるといえよう。

1回目の面接では、セラピスト同様、セッションAが

表4 動作頻度

ペア番号	1回目	2回目	3回目	総計	面接全体					1回		
					A	B	C	D	E	A	B	C
1	81	54	74	209	73	38	28	33	37	36	9	14
2	46	54	72	172	27	35	39	28	43	7	17	5
3	89	61	69	219	60	50	37	41	31	23	21	14
4	96	49	43	188	60	30	17	35	46	45	13	5
5	63	67	57	187	54	44	12	42	35	15	9	2
6	34	38	56	128	33	18	19	34	24	7	4	5
7	65	97	68	230	54	47	41	42	46	13	15	14
8	37	39	58	134	41	21	28	21	23	19	6	5
9	18	14	46	78	18	8	22	14	16	3	3	1
10	64	82	31	177	53	36	31	27	30	29	21	3
11	69	58	50	177	67	31	38	24	17	26	19	19
計	662	613	624	1,899	540	358	312	341	348	223	137	87
平均*	12.04	11.15	11.35	11.51	16.36	10.85	9.45	10.33	10.55	20.27	12.45	7.91

表5 動作頻度

ペア番号	1回目	2回目	3回目	総計	面接全体					1回		
					A	B	C	D	E	A	B	C
1	128	114	92	334	120	48	89	33	44	37	18	36
2	66	91	81	238	78	59	43	12	46	18	11	18
3	96	98	92	286	68	58	39	63	58	8	15	19
4	57	39	91	187	47	38	27	39	36	9	12	4
5	43	58	57	158	40	42	25	22	29	14	9	2
6	88	58	70	216	61	20	62	40	33	22	10	26
7	99	114	134	347	99	50	61	66	71	23	18	14
8	54	42	59	155	51	26	36	28	14	23	8	17
9	52	35	61	148	39	42	27	16	24	23	11	3
10	76	103	72	251	48	53	48	69	33	13	32	12
11	97	82	83	262	67	38	36	65	56	27	20	20
計	856	834	892	2,582	718	474	493	453	444	217	164	171
平均*	15.56	15.16	16.22	15.65	21.76	14.36	14.94	13.73	13.45	19.73	14.91	15.55

* 平均は比較のため1セッション単位で計算してある。

(セラピスト)

目		2 回 目					3 回 目				
D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
15	7	21	8	6	10	9	16	21	8	8	21
1	16	12	10	4	11	17	8	8	30	16	10
21	10	31	11	8	2	9	6	18	15	18	12
5	28	10	2	6	25	6	5	15	6	5	12
21	16	18	21	4	11	13	21	14	6	10	6
10	8	8	9	8	7	6	18	5	6	17	10
6	17	20	16	22	23	16	21	16	5	13	13
3	4	12	7	9	7	4	10	8	14	11	15
5	6	3	3	3	1	4	12	2	18	8	6
6	5	17	8	19	15	23	7	7	9	6	2
4	1	20	12	13	6	7	20	0	6	14	9
97	118	172	107	102	118	114	144	114	123	126	116
8.82	10.73	15.64	9.73	9.27	10.73	10.36	13.09	10.36	11.18	11.45	10.55

(クライアント)

目		2 回 目					3 回 目				
D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
19	18	42	21	35	6	10	41	9	18	8	16
1	18	30	29	9	9	14	30	19	16	2	14
18	36	34	27	13	20	4	26	16	7	25	18
23	9	11	3	11	1	13	27	23	12	15	14
8	10	16	11	9	7	15	10	22	14	7	4
20	10	25	3	10	12	8	14	7	26	8	15
24	20	31	18	22	24	19	45	14	25	18	32
4	2	26	5	4	4	3	2	13	15	20	9
8	7	5	18	4	3	5	11	13	20	5	12
17	2	34	9	16	31	13	1	12	20	21	18
26	4	27	17	9	18	11	13	1	7	21	41
168	136	281	161	142	135	115	220	149	180	150	193
15.27	12.36	25.55	14.64	12.91	12.27	10.45	20	13.55	16.36	13.64	17.55

最も頻度が高いが、頻度が最少になるのはセッションEである。また、セラピストのものほど増減が著しくないのが大きな特徴となっている。

2回目では1回目と異なり、セッションAが3回の面接の全セッションの中でもっとも頻度が高く、セッションB～Eは徐々に右下がりになっている。

3回目では1セッションごとに増減をくり返している。最大はやはりセッションAで頻度数220であり、最少はセッションBの149である。しかし、その差71は、2回目の最大値と最小値の差166の1/2弱であり、1回目の差81よりも少なくなっている。

3回をとおしてみると、クライアントの場合、1回目ではさほど変化の幅は大きくなく2回目をもっとも大きく、3回目は前2者に比べ、もっともその幅が小さかった。

3. 群間比較1 (セラピスト)

グラフ1の回間比較の推移を見ると高得点群では、1回目の総頻度数と3回目のそれとがほぼ等しく、最少である2回目との差がかなり大きくなっている。これに比し、低得点群では、第1に、3回ともに頻度が低く、総数も432であり、高得点群の600の7割強しかない。また第2に、もっとも多いのが2回目であり、逆のカーブを描いている。

面接全体の中でのセッション間比較に関しては、高得

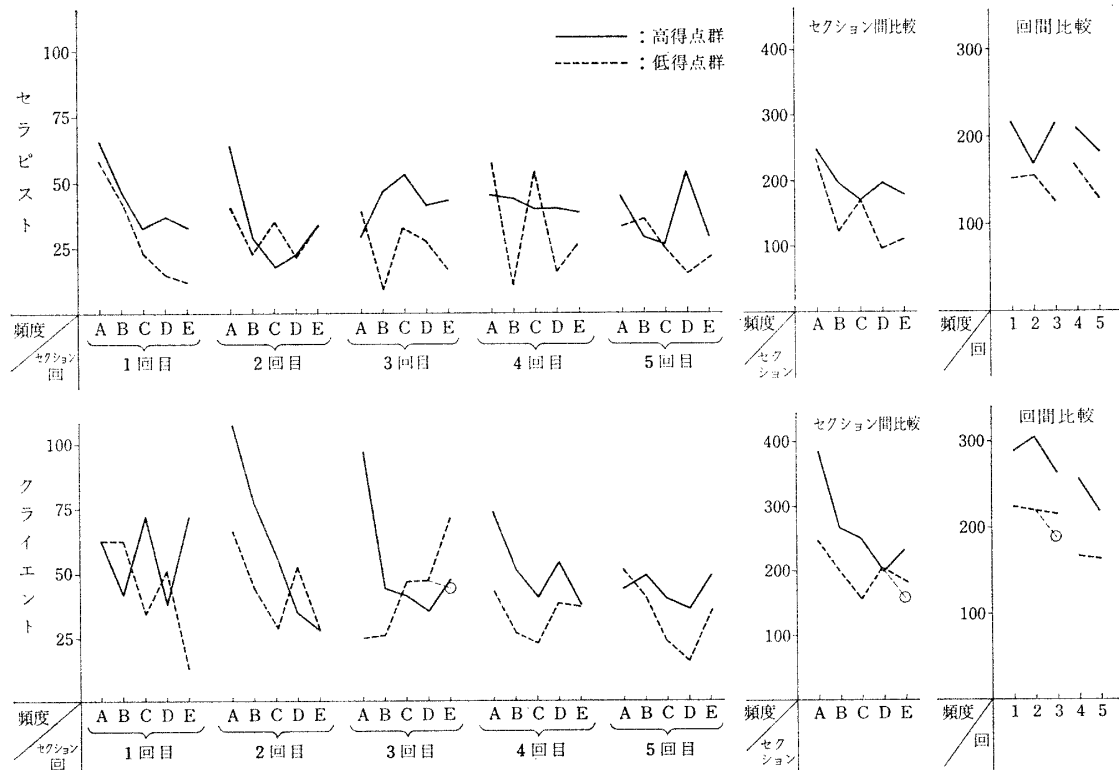
点群はかなり傾斜がゆるやかになっている。低得点群のものはセッションCで一旦増加し、セッションD, Eでは頻度数が96, 110と大きくさがっている。

各回ごとの推移に関しては、高得点群は、5回のグラフの形状がそれぞれなめらかに推移しており、しかも5回が各々全く異なる形となっていることが注目をひく。それに対し、低得点群では、1回目が大きく右下がりであり、セッションD, Eがそれぞれ15, 12となっているのが最も特徴的であり、他の回には高得点群ほどははっきりとした推移はうかがえない。

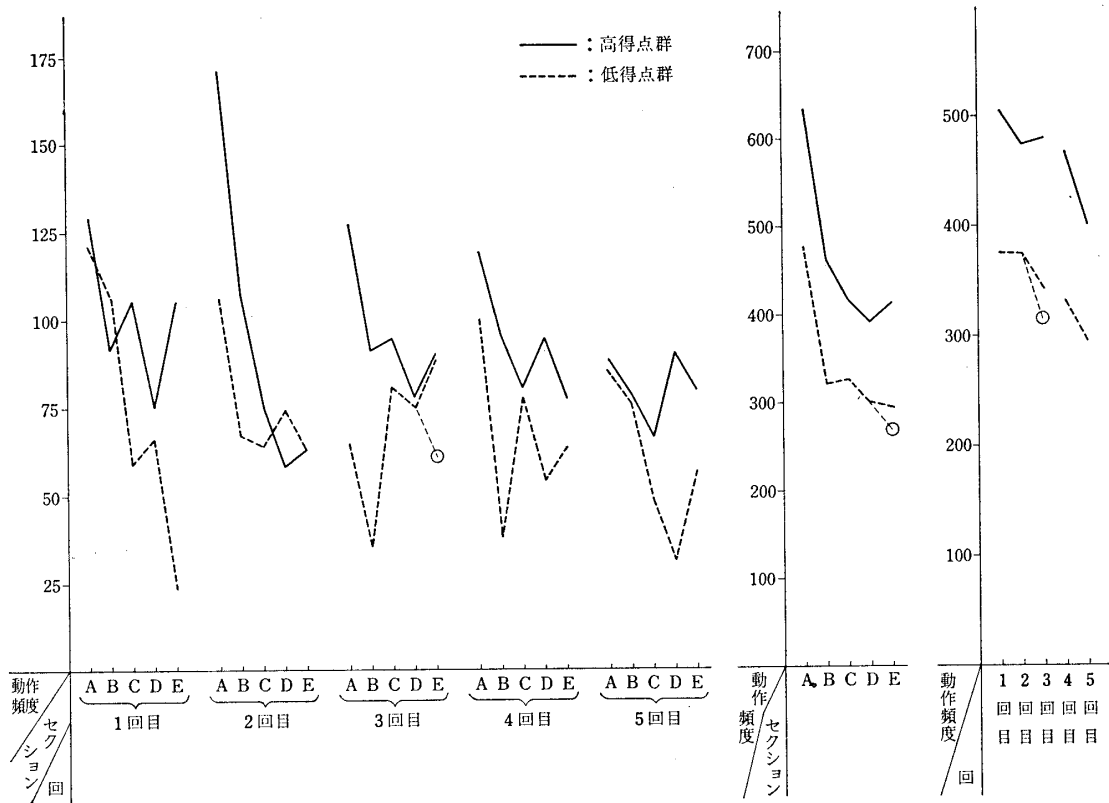
4. 群間比較2 (クライアント)

高得点群のクライアントは2回目が他の回より多少高い最大値をとっており、高得点群のセラピストと逆になっている。低得点群はほぼ直線的にやや右肩下がりの傾向がある。低得点群は、高得点群に比し、頻度数が少なく、1回目で4/5弱、2回目で3/4弱、3回目が4/5強となっている。これはセラピストに関してとはほぼ同様の結果になっている。面接全体の中でのセッション間比較に関しては、高得点群は全体的にかなり変化が大きくなっている。低得点群では全般的に変化に乏しく、また低水準にとままとまっている。

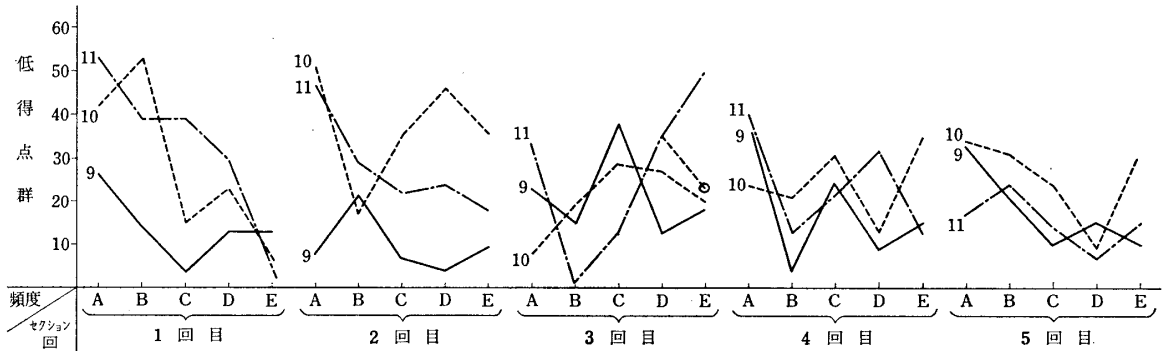
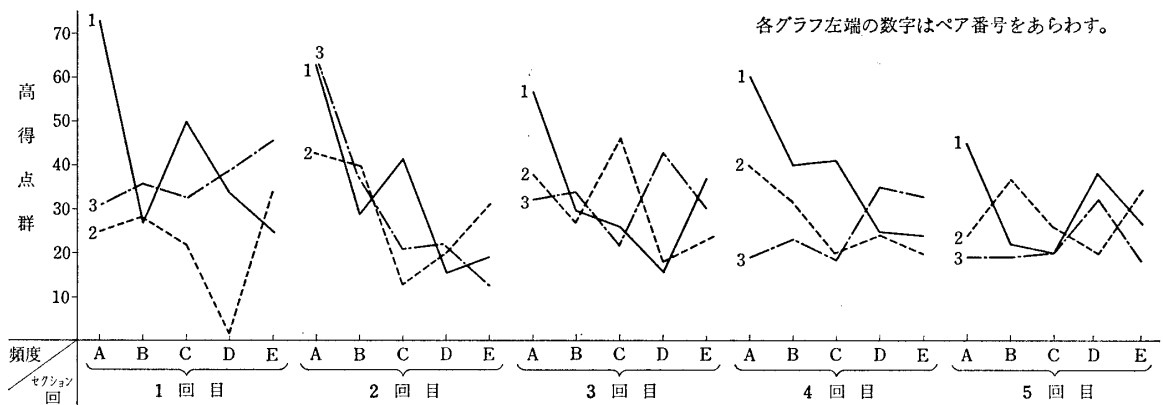
各回の推移に関しては、高得点群では1回と他の回との形状が明瞭に異なり、しかも2回目から5回目にかけては、一定の範囲にはっきりとままとまっているのが特



グラフ1 群間比較



グラフ2 群間比較(ペア)



グラフ3 ペア間比較

徴的である。それに対し低得点群では明瞭な傾向は見られなかった。

5. 群間比較3 (ペア)

以上の傾向はグラフ2を見ることによっではっきり確認される。このグラフはカウンセリング場面内でのコミュニケーションの相互性を推測するために、セラピストとクライアントの「動き」の頻度数を単純に加算して作られたものである。

高得点群の各回ごとに形状が異なる点、また回を追うごとに一定範囲に収束していく様子をはっきりと表されている。それに対し低得点群ではそうした傾向は推測できない。しかし、低得点群では2回目を除いて他の4回では極端に低いセッションがあることが新たに注目をひく。これは各ペアともに、セラピスト、クライアント双方の活動水準がまたぐ低下してしまうことがあることを示唆している。

各ペアを更に詳細に比較するためにグラフ3を見ると、高得点群では、回を追うに従い傾斜がゆるやかになり、5回目では水平に近くなってくる。また頻度も少数の例外を除いて一定の範囲(38~18)にまとまってくる。低得点群でも、回を追うに従い勾配は水平に近づき、一定の範囲(34~7)にまとまってくる。しかも低得点群の数値の約半数は18~7の間に入っている。

表6 分散(高得点群)

回	1	2	3	4	5	セッション間比較
A	456.00	98.67	113.56	280.22	126.89	293.40
B	16.22	22.89	8.22	48.22	62.00	41.09
C	132.67	138.67	110.22	102.89	8.00	119.87
D	268.67	6.22	150.89	20.22	56.00	118.33
E	74.00	56.00	32.67	29.56	42.89	68.91
回間比較	224.89	258.11	113.93	120.80	67.26	

表7 分散(低得点群)

回	1	2	3	4	5	セッション間比較
A	122.89	376.22	105.56	46.22	60.67	184.62
B	260.22	24.89	59.56	48.22	17.56	158.38
C	213.56	130.89	106.89	14.89	34.67	115.89
D	48.67	294.22	82.67	100.67	11.56	137.20
E	11.56	126.00	214.22	98.67	80.22	151.42
回間比較	263.53	219.13	151.49	110.92	81.56	

* 表6, 7ともに、回間比較, セッション間比較の項は $n=15$, 他は $n=3$

ここで、両群の各セッションにおける各3ペアの「動き」の頻度の分散の値を表にしたものを検討しよう。

全体的に、高得点群でも低得点群でも回を追って分散の値が低化するの予想されるところと一致した。一方セッション間の比較では、低得点群では顕著な差異は認められなかったが、高得点群ではセッションB, Eがかなり低い値をとっている。これは、高得点群の各ペアが、50分間の面接時間の使い方のうえで共通する部分もっていることを示していると言えよう。このことは、25セッションの各々を検討することによっても裏付けられる。高得点群では、10.00未満になるセッションが、2回目Dセッション, 3回目Bセッション, 5回目Cセッションと3セッションあるが、低得点群にはない。高得点群の3セッションにおけるペアの「動き」の頻度数の平均値は、各々順に19.33, 30.33, 22となった。低得点群の最も低い3セッションを選んで、その頻度数の平均を求めると1回目Eセッションの8.33, 4回目Cセッションの25.67, 5回目Dセッションの10.33となる。

以上を要約すると両群の特徴として次の諸点が検討された。

高得点群では(1)セラピストでは各回ごとに相異なる推移を示しながらも連続性が感じられること、(2)クライアントでは、1回目と他の回の推移が異なるパターンを示し、回を追うに従い、一定の範囲内に収束していくこと、(3)またペアとしては、分散の最も低い3セッションの頻度数が19.33から30.33となり、5回目までにはほぼ18から38の間にまとまってくる事が確認された。

低得点群では(4)セラピストの1回目D, Eセッションが非常に低い頻度数(各々, 15, 12)になること以外には、セラピスト、クライアントともに顕著な推移における一貫性は推定されないこと、(5)ペアとしては極端に低いセッションが、2回目以外の回にはあること、(6)特に1回目のEセッションでは、3ペアの平均8.33でという非常に低い数値になること等が指摘された。

5. 事例の検討

a ペア1に関して

ペア1は「体験目録」のスコアの和が、初年度の3回で754でもっとも高かったものである。セラピストのスコアは356でセラピスト11名中の2位であり、クライアントは344で1位であった。セラピストは、積極的な意欲の因子である第2因子で76と高いスコアを示し、クライアントも、意欲と充実感の因子である第1因子で高いスコアを示している。なお、このクライアントは、前もって自分にとっての問題点をはっきりと自覚して1回目の面接に臨んでおり、3因子すべてに高いスコアを示し

ているセラピストとともに、きわめてスムーズに面接に入ったペアであるといえよう。

1回目の面接の冒頭でセラピストは的確で手短かな場面設定を行ない(セクションAの前後)、ついでクライアントの問題の提出に際してはまったく受容的な態度(セクションBの前後)で接し、中間ではクライアントの問題に関する明確化、事実関係の確認を通じて問題点のクライアントにとっての再構成、再把握につとめ(セクションCの前後)、クライアントの再把握した問題点に関し疑問点を提出し、自分のイメージをあらわす(セクションDの前後)、最後に、再構成された問題点に対しクライアントによって表明された感情を受容している。以上のプロセスは、グラフのセラピストの動作頻度数にも明瞭に反映されていると思われる。

これに対し、クライアントは、1回目冒頭でのセラピストの場面設定に対し、自分の思い違いや疑問をセラピストに表明して場面設定を確認し(セクションAの前後)、ついで自分の問題点を思い起こしつつ周辺から話してゆき(セクションBの前後)、セラピストとともに、自分の問題点の再把握を行ない(セクションCの前後)、再把握された問題点の整理を自己の内面で行ないつつ、それをセラピストに表明している。(セクションDとEの前後)

このペアのこの回の面接では、セラピストに関しては、場面設定の時にもっとも動作の頻度が高く、明確化、確認などでクライアントに働きかけるときも若干頻度が高くなっている。相手の発話に集中しようとするときはこれに反して頻度数は10弱とかなり低い水準になっている。クライアントに関しては、セラピストとの共同作業として対話するときには頻度が高くなり、自分の内面の作業が主になりセラピストに対する伝達の方が従になるときに頻度は低くなっているといえよう。

2回目の冒頭では、クライアントの側からの場面設定の確認と、近況報告とが相次いで行なわれ、セラピストはクライアントの場面設定の確認を短い言葉でうけいれたのちに近況報告については受容する態勢に入っている(セクションAの前後)。その後者がかなり続いて(セクションBの前後を含む)、中盤ではクライアントが自己の問題にかかわる自分の信念をセラピストに伝えようと努め(セクションCの前後)、自分の問題にとりくんだあとで、セラピストがクライアントの態度に関して質問し(セクションDの前後)、最後にクライアントは自分の成長過程と社会のあり方との関連を整理しようとしている(セクションEの前後)。

3回目では、最初に気候の過ごしにくさに関する話が

かわされ、その後、悪い気候に対するクライアント自身の対処法が話題となり(セクションA)、ともに問題に関するクライアントの感じ方を話題にしたのち、セラピストが問題に対するクライアントの感情を明確化し(セクションB)、中盤ではクライアントの問題にかかわる周囲の人間関係の細部に関してクライアントが説明し(セクションCの前後)、その中でクライアントの居方が話し合われ、クライアント自身の問題の核心が、自分に対して持っている理想、決意と現実の弱い自分との乖離というかたちで表明された(セクションDの前後)。そして最後では、セラピストにより、実験面接の終了が告げられその後面接を継続するか否かはクライアントに委ねられていることが伝えられる。クライアントはその発言を受け、セラピストに継続を依頼し、セラピストは具体的な日程などをクライアントと打ち合わせた(セクションE)。

2, 3回目のプロセスも、動作頻度の推移と適合し、1回目に関して行なった考察を裏付けているといえよう。すなわち、セラピストに関しては、相手に働きかけようとするときに頻度が高くなり、相手の発話に集中し受容しようとするときには低くなった。各々、頻度数は前者が大体15以上であり、後者が大体7から10の間であった。またクライアントに関しては相手への伝達が主となるときに頻度は高く、自己の内面へのとりくみが主となるにつれて頻度は低くなった。前者が大体16以上、後者が6から10の間といえよう。

b ペアに関して

ペア11は「体験目録」において極端に低いスコアを示した。セラピストは初年度の3回の面接におけるスコアの総和が-87、クライアントは-53でともに最下位であった。スコアの総和が負になったものは、セラピスト、クライアント22名を通じて、この両名だけであった。セラピストは1回目の「体験目録」で8要因すべてに関し、負のスコアを示し、2回目では若干負のものが減少したが、3回目でも負の要因が記録されている。他方クライアントも1回目では8要因中5要因に関して負のスコアを示し、2回目で負のスコアを示したものに3要因と減少したが、3回目で再び6要因と増加している。

因子に関していえば、セラピストは安定さと充実感の因子である第I因子と、深い尊重を示す第III因子とで大きな幅で増大してはいるが、他のセラピストと比較すると3回目のスコアで見ても、平均を大きく下まわっている。第II因子に関しては低い水準のままで大きな変化は見られなかった。クライアントに関しては、意欲と充足感を示すと考えられる第I因子は多少増減は見られるも

の、非常に低い水準にとどまり、安定さの因子である第Ⅱ因子では変化なく低い水準を示し続け、ともに面接3回をとおして負のスコアを示した。ただ、セラピストに対する知覚を反映すると考えられる第Ⅲ因子だけでは、1回目は負であったが、2、3回目は正のスコアをとっている。しかしこの増加に関しても多少の疑義の余地を残しておくべきであろう。いずれにしても、実験面接の枠内でなかったら、きわめて早い回の内に中断すると思われた事例である。

さて、初回面接の冒頭ではクライアントの方から「なんでもいいんですか」と問いかげがなされ、セラピストの「ええ、どんなことからでもどうぞ」という答えにクライアントは当惑し、「普通の……カウンセリングだとどうということからまずはなすの……」かとセラピストに逆に問いかけている。(セッションAの前後)それに対し、セラピストがクライアントに対し納得のいく説明をできないうちに、クライアントはカウンセラーまたはカウンセリング一般に関して質問しはじめる。さらにクライアントはセラピストがなぜカウンセラーになろうと思ったか、そのきっかけを問いかげ、セラピストは答えようとはしたが、うまく言えずに考えこんでしまう(セッションBの前後)。クライアントのカウンセリングに関する質問とクライアントにとっては不十分と思われるセラピストの答えとが交互に続く。クライアントの質問の意図をとらえきれなかったセラピストが、クライアントの意図を明確にしようとして反問すると、クライアントは曖昧にそれに答え、若干の沈黙ののちに、「カウンセラーになるには……人格がある程度」できている必要があるだろうといいつつ、再度質問を開始する。(セッションCの前後)その後、話題はカウンセラーとしてのセラピスト個人に関するクライアントの質問とセラピストのYes-No 式の短い答えとのやりとりに発展する(セッションDの前後)。そのうちに両者ともに沈黙がちになり、最後は沈黙が続いた(セッションEの前後)のちに、セラピストが終了を告げ、1回目は終わった。

以上のように、1回目はクライアントの質問という形のセラピストに対する働きかけで開始され、セラピストはそれに対しなんとか対処しようと努力している。こうしてセッションAからCにかけては両者ともにかなり高水準の頻度が続く。しかし、クライアントの質問がセラピスト個人に関する疑惑の表明という様相を婉曲ではあるが濃くしはじめると、クライアントの動作頻度は上昇し、これに反してセラピストの動作頻度は極端に(頻度数4)少なくなり、あとは、沈黙という形で言葉のやりとりもなく動作も極端に少ない(セラピストが1で、

クライアントが4)状態におちいる。

面接後オペレーターの短い口頭での質問に対しセラピストは疲労感を訴え、事前に思っていたことと現実が異なり当惑したとの感想を述べている。またクライアントも事前の予想に反した事態であったという内容を答えている。

以上より、この面接でセラピストの動作頻度が高かったのは、前半の3セッションであり数値は26と19の間であった。この時期にセラピストはクライアントの質問に当惑を覚えつつも、なんとか対処しようとしていた。ペア1のセラピストとの異同を検討しよう。セッションAは両者ともに頻度数が高かったがペア1では36であり、ペア11では26であった。これは、ペア1のセラピストは自分の方から場面設定をしようとして相手に働きかけたが、ペア11では相手の出かたを待つ受け身の姿勢があったことが大きく反映されたと思われる。セッションB、Cで、ペア11のセラピストは、発言する度数はさほど多くはないが、クライアントの質問に対処しようという形で相手に対し働きかけていたと思われる。この点でペア1に関して述べた「相手に対する働きかけの際には15以上」の頻度を示すという範囲は、ここでも一応肯定されよう。

セッションDではクライアントに対する対応としては、深くかかわらず最低限の言葉で対処しようとする態度が観察された。このような最低限のうけこたえの可能性は残しつつも防衛的になっているセラピストの動作頻度は、一応4前後と推定されよう。

クライアントに関しても、ペア1での推定は裏づけられた。相手に対する働きかけとしては大体16以上という枠内にセッションA～Dの数値はおさまっている。セッションAとDで、それぞれ、27、26と若干高くなったのは、セッションAでは新たな場面への適応不全感の反映、セッションDではセラピストに対する攻撃性が加味されたことの反映と考えられよう。

2回目は、クライアントの「なに話そうかな」という自問自答とも思われる呟きを受け、セラピストが「まあ、どんなことでも気のついたことを」と答えて始まっている。それに対し、クライアントは聞きとりにくい呟きで反論し、若干のポーズの後に、セラピストの休暇の予定へと話題をそらしている(セッションA)。

その後、不況の話などが続き、セッションBの前後ではクライアントが一方的に不況や企業の倒産といった事態に関して感想を述べ、セラピストは短い言葉や相槌をはさみつつクライアントの話を聞いている。

クライアントの一般的な話は中盤まで続き、セクショ

ンCでは多少の沈黙の後にセラピストの方からのクライアント個人の話はないかと問いかけている。

その後少しずつクライアント自身についての話題が開始し、セッションDで、クライアントは自分の過去の生活と今のものとを比較しつつ感想を伝えている。セッションEになると自分自身の性格についての感じ方などが語られるようになる。この両セッションでセラピストは割合おちついてクライアントの話に聞き入っている。

3回目では、冒頭でクライアントが「今日で終わりなんでしょ」ときり出し、次回の実験面接の予定に関して質問するがセラピストが多少あわてつつ聞いていないとクライアントに伝える(セッションA)。その後、沈黙がちになり、セッションBではまったくの沈黙が続く。中盤になって、先回話題になったクライアント自身の性格と問題が再び話され、セラピストは疑問点を聞きイメージを合わせようとし、それ以外は受容しようとする(セッションC)。同様のやりとりが、その後も続くが、イメージを合わせようとするセラピストの質問の多くは、クライアントによって否定されたり修正されたりする。そのため、セラピストもクライアントも共に、もう一つ釈然としない感じが段々濃くなっていく。

セッションDではそうした関係の中でのクライアントの自分の問題に関する発言をセラピストが明確化しようと試み、クライアントは一旦は肯定しつつも、消極的に否定している。この緊張を含んだおちつかない雰囲気はいよいよ強くなり、セッションEの直前で、クライアントは新しい事実をセラピストに伝え、現在の自分の状態について一旦、「今……ちょっと怒り狂っている……」と言いつつも、直後にそれを打ち消そうとする(セッションE)。セラピストは新しい事実を知っていればもう少しクライアントを理解できたであろうと告げるが、クライアントはそれに直接は答えず、面接のおかげで大分おちついたということをおちつかない様子でセラピストに伝える。セラピストが、その点では必ずしも同意できない旨伝えたところで時間となり終了する。

2, 3回目も前述の観察をほぼ裏付けたが特に3回目注目すべきなのは、セッションAでのセラピストの動揺(頻度20)と、両者のくい違いが明瞭になっていくセッションD, Eでのクライアントの動揺(頻度21と41)とであろう。以前の観察からは面接関係の中で、相手に働きかけるか否か、自分の内面に注目したり、相手に注目したりするか否か、という2つの軸で、動作頻度の高低が解釈されたが、ここでは情緒的に不安定になり、動揺している状態では、頻度数が異常に高くなることもあることが確認された。

IV 要約と結論

本論文では、カウンセリング場面における可視的な「動き」を実験的な設定で数量的にとりだし、「体験目録」によって層別化された高得点群と低得点群との間に見られる差異を検討してきた。以下に考察の結果を要約しておく。

(1) 全体的にセラピストの「動き」の頻度はクライアントのそれの約3/4程度となった。

(2) セラピスト、クライアントともに、初回面接が最も頻度が高く、かつ、頻度数の分散も1回目が最も大きい値となり、以後は一定の値に近づいてきた。

(3) 面接開始直後のセッションAの頻度が最も分散の値が高くなった。

(4) 高得点群のセラピストに関しては、各回ごとに相異なる頻度の推移を示しながらも連続性が見られた。

(5) 高得点群のクライアントでは、1回目と他の回の推移が異なるパターンを示し、2回目以降は一定の範囲内に収束していった。

(6) 低得点群のセラピストとペアとでは極端に低い頻度数を示すことがある。これは事例の検討の項でも確認された。

(7) 事例の検討をとおして、「動き」の頻度数が当事者のカウンセリングへの取り組み方の違い及び内的な感情の状態によって左右されることが確認された。

以上、本論文ではカウンセリング場面におけるセラピスト及びクライアントの「動き」を実験的な設定で数量的にとりだし、高水準のカウンセリング関係に入った群と低水準のそれとの比較を行なった。しかし本論文でとりあつかった部分は非言語的な領域の中でも狭い分野に過ぎない。今後は、非言語的な領域の他の分野でもカウンセリングに関する同様な試みが望まれる。また、カウンセリングに関する他のアプローチとの総合も将来の大きな課題と言えよう。

注

- 1) 文部省科学研究費の交付を受け佐治を中心として組まれたプロジェクト。「カウンセリングにおけるコミュニケーションに関する心理学的研究」を共通の課題とし、質問紙による調査、観察者による評定など多角的にカウンセリング過程をとらえようとしている。本論文はその中の非言語的な分野の一部をまとめたものである。
- 2) Gladstein, G. A., "Nonverbal Communication and Counseling/Psychotherapy: A Review," *The Counseling Psychologist*, vol. 4, 1974, pp. 34~41 and 54~57
- 3) 田畑治『心理治療関係による人格適応過程の研究』風間書房, 1978

- 4) 2年間にわたる本実験の5回の面接すべてをとおしての心理治療体験目録の結果の詳細な検討は飯長によって後に報告される予定である。
- 5) Scheflen, A.E. *Body Language And The Social Order*. Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall Inc. 1972
- 6) Scheflen, A.E.. "Quasi-courting behavior in psychotherapy", *Psychiatry*, vol. 28, 1965
- 7) Argyle, M., *The Psychology of Interpersonal Behavior*, Harmondsworth, England, Penguin Books Inc. 1967
- 8) 木戸幸聖『面接入門：コミュニケーションの精神医学』創元社, 1976
- 9) 瀬谷正敏『対人関係の心理』培風館, 1977